

《研究ノート》

絵本はSDGsの土壌(1) —自発的な心に成長するために—

田中幹子・奥山津久海

はじめに

昨今、SDGsが社会的関心となっており、絵本の世界とも結びつける動きがみられる。

持続可能な未来を担うのは、子どもであるという理由から、さまざまな事業や法人によって絵本とSDGsの取り組みが見られる。主に「SDGsを教える」絵本と絵本の中にSDGs要素を見出し結び付ける二つの手法が取られる。「教育的な絵本」は、絵本本来の醍醐味である自由な解釈とは目的が異なるため本稿の考察からは外す。本稿で問題にするのは、後者である。絵本は思想を押し付けるものではなく、読み手に自由な解釈と自由な想像をさせるのが本質である。SDGsと結びつけようとすれば「こう読まなければならないんだ」と誘導させ、フィルターをかけてしまう危険がある。絵本は教示的なものではない。

SDGsは「誰一人取り残されることのない持続可能な社会」の実現を目的とする。未来の主角を担うのは子供である。子供自らが持続可能な社会を創りたい、創るのだと思わなければ実現できない。SDGsと絵本はどのような関係が望ましいのか。本報告はその手がかりを3世代に渡って読まれてきた絵本を出発点に、発達心理学を参考にしながら考察したものである。

この問題に取り組んだ理由は、SDGsカタリストであり、絵本講師認定講座修了、こどもとともに本を楽しむ会会員の大阪大学学生の奥山津久海氏に「絵本の魅力と持続可能な社会とを結びつけることはできないだろうか」という企画の相談を受けたためである。奥山氏と共にSDGsの観点から絵本の

分析を行い、講演・展示会を「剣淵町立絵本館」（2022年7月11日から7月18日）「札幌市立西岡図書館」（2022年10月27日から11月23日）「千歳市民文化センター」（2023年2月25日）において開催した。まず奥山氏に、この企画を立ち上げた背景および、SDGsの解説寄稿を求めた。

1 絵本の企画立案の背景及びSDGsについて

子供たちが安心して暮らせる未来を創り、その社会が今後も続けられるようにしていく事、これがSDGsの本質と言えよう。SDGsとは Sustainable Development Goals の頭文字の略で 2015年9月の国連サミットで日本を含む193の国、全会一致の合意の下採択された。2030年までを期限とする世界共通の目標、貧困や飢餓や暴力を撲滅し、地球環境を壊さずに発展させ、人権が守られる世界を実現する「世界を変革するための17の目標」である。飢餓で苦しむ人々がいる一方、大量の食品ロスが生まれたり、産業の発展と反比例してCO₂の排出量やプラスチックゴミが増加する問題、性が不平等に扱われる事項など、社会問題が指摘されている。SDGsとは、このような社会・経済・環境の三側面から作られた17の国際目標である。SDGsは食品ロスやプラスチックを出さないような「活動」を指すのではなく、持続可能な社会を目指し解決するための「目標」群のことを指す。SDGsにはMDGsという前身がある。MDGsは主に発展途上国の課題解決を目的にしており、かつ取り組むのは一人一人というより、国連や政府が主体となって取り組んできた。この「持続可能な開発」を世界規模にしようという概念から全会一致でSDGsが採択された^(*1)。

特に日本ではSDGsの注目も高く、「持続可能な開発」つまりSDGsを意識した生活は当たり前になっている。「SDGsの認知度と取り組み状況」（一般社団法人日本能率協会 2020年度7月実施）によると、企業経営者の約9割がSDGsを認知しており、取り組みを実施している企業は6割を超える。

しかし一方で、「SDGsウォッシュ」という言葉があるように見せかけだけのSDGsの取り組みや、SDGsをブランド化しているような企業も多いよ

うにみえる。「SDGs 達成のための個人での取り組みに関する調査」(株式会社ネオマーケティング 2020年12月)によると、SDGsの認知は51.9%と半数を超えるも、SDGsを意識して行動している人は1割程度にとどまることがわかった。多くの個人や企業がSDGsを何となく知っている状態のまま、深く本質に迫ることに取り組んでいないといえよう。

日本では持続可能な社会作りに向けて一人ひとりが自主的に行動しているとは言えない現状である。どちらかと言えば企業がブランディングのために活動を行ったり、半ば強制的にSDGs学習を強いたりしている印象があり、表面的な知識にとどまる人も少なくない。

その原因の一つに「日本人は、個人として自律的に社会的問題を考えない」という社会への関心の低さがある。持続可能な社会を実現するには、取り組む姿勢が重要である。取り組まなければならない課題と受け身で捉えるのでは関心も一過性のものになってしまう。わが事として主体的に考え、前向きに積極的に活動することが大切である。

私事の体験を紹介したい。スウェーデンの美術大学に留学中、ロシアのウクライナ侵攻が始まった。そのためにウクライナを出ざるを得ない人々を私の大学も受け入れ、共に暮らし始めた。彼らは毎日明日生きていられるか、それとも死んでしまうかもという究極の環境で生きてきた。私が今までまったく感じた事のない感覚の中で生き抜いてきた彼らと共に学びながら、初めて、「自分の幸せは当たり前ではなかった。幸運にも自分は安全に生活できていたんだ」と気付かされた。

日本は平和で便利で安全な国である。それはとても幸運なことだが、だからこそ気づかないことも多い。自分一人が何をしてもしなくても世界に影響を与えないと思いがちである。珊瑚が全滅の危機に瀕している事やイタリアで大旱魃が起こり農作物全滅した事を知らなくとも生きていける。しかし何も見ないまま過ごしていると、将来、気づかぬうちに海洋の生態系が崩れてしまうかもしれない。何も対策を打たないまま、未来の人たちが食料不足になるかもしれない。今の私たちは過去の人たちがそうしてきたように、次の世代の人のために続けられる社会を作るのが責務なのだ。少なくとも、その

ような問題に対して関心を持ち、たとえばリサイクルを心掛けたり、環境にやさしい商品かを値段以上に考慮し選択するなど自分のレベルにあったとり組みができるはずである。

現在、安全に暮らせているのは今まで生きぬいてきた人々のおかげである。今度は私たちが未来に生きる人のために、できることをする、これが私が環境問題やサステナビリティに取り組みたいと考える理由である。1年間暮らしてきたスウェーデンは福祉国家で有名である。しかしそれを支えているのは、25%の高い税率であった。この高い税率によって得た収入を公共の費用に回している。スウェーデンの国民は小学校から大学まで、ほぼ無料で通うことができる。留学生に対しても、月々の学費と寮費、生活費合わせても日本に比べてはるかに費用がかからない。このような「教育機会の平等」は簡単には成し遂げられないが、できる限り、世界中の子供が、平等に、高い質の教育を与えられるべきだと考える。

教育問題に代表されるように、未来の子供に向けて、今後も続けられる社会を作ること、これがSDGsの神髄といえる。ならば未来を担う子どもたちがSDGsを考える主役ではないだろうか。子ども自らが自分が心地良いことは、地球に良い事に繋がっていることを発見するようなものでありたいと思った。そしてこの自発的気づきの媒介として最も適切なものが絵本ではないか、と考えた。

日本が世界から評価される取り組みが、教育分野において早くからSDGsを学習指導要領に盛り込んできた点である。小学校では2020年度、中学校では2021年度、そして高校では2022年度からSDGsを学ぶようになっていく。このような体制のためか絵本の世界でもSDGsの項目を解説し、「こうすべきだ」と教示的な姿勢で絵本が提供される場面も多くなった。しかし絵本は松居直氏や松岡享子氏が提唱されているように「～すべきだ」と押し付けられるものではなく、子供に自由な解釈をさせるものである。松岡氏が述べられた「子どもに本の感想を尋ねたり、書かせたりする必要はなく、読みっぱなしでいい」、「たっぷり遊び、ほんやり空想するうちに、読んだものが取り込まれ、心の中で発酵し熟成する。それは大人になっても心に残り、

糧になる」、「子どもの時に言葉の力と想像力を無理なくつけることが人間の土台になり、内面の豊かさと強さにつながる。それが生きていくうえで大切」という言葉に絵本の本質が込められている^(＊2)。絵本は子どもの自発性を育てるものである。成長し心地良いと感じることは、地球環境に良い事だったということを目覚めに発見してほしい。そして自発的気づきの媒介として最も適切なものが絵本ではないかと考えた。

現在、売り上げの6割を占める絵本は、大人が子供の頃に読んだ絵本の中で「自分も子供に読んであげたい本」である。そのような絵本は、60年、70年と、3世代に渡って読まれる。幼い時に会って夢中になり、手元に置いていた絵本に、思春期に一人で読み慰められたり、大人になって忘れた頃に再び読むと突然、絵本の奥の深い意味に気づいたりする。そして知らず知らずに絵本が自分の心を育てていたことを知る。親から子へ何世代も何十年も読まれ続けた絵本をあらためて読みかえすと、それがSDGsの精神に通じていくことに気づく。重要なのはそれらの絵本は決してSDGsを目的として描かれたものではないことである。長年読まれてきた絵本を中心に紹介し、その世界観がSDGsの精神の土壌として捉えることを提案したいと思った。そして田中幹子先生のアドバイスを頂き、絵本の里である北海道剣淵町「絵本の館」で展示・講演会を企画した。(奥山津久海 記)

2 心の発達と絵本

絵本は子どもが初めて出会う外の世界である。絵本との出会いは子供自らが切り開くものでない。最初は保護者が与えるものである。まだ言葉を発しない我が子に添い寝しながら絵本を読み聞かせする親は多いが、子どもが字を読み出すと、徐々に子供任せになることが多い。しかし絵本は子供が一人読むものではない。絵本は「大人に読んでもらうもの」である^(＊3)。0歳児から絵本を楽しむことができる。子供の心は日を追うごとに飛躍的に発達する。心が成長するにしたがって子どもは同じ絵本から新たな感動を得る。子供の心を発達心理学的に見ていく^(＊4)。

0歳から1歳

8か月くらいまでに子どもは親との強い絆を感じ、「愛着形成」期^(*5)を迎える。生後10か月には絵本を楽しむことができる。そのため多くの自治体には0歳児の家庭に絵本を配布するブックスタートという制度がある。^(*6)乳幼児期の心の発達には、**愛着**の形成が必須である。**愛着**の形成は、人への基本的信頼感を育み、心の発達に大きく影響する。子供は絵本を通して大人とのかかわりを楽しむ。楽しさを共有する体験は、成長の土台となっていく。「呼びかけるような文章」「本物のような写実的な表現」「言葉にリズムがあるもの」のような絵本を喜ぶ。しかし絵本への興味以上に幼児にとって重要なのは、読み聞かせる声や接触の心地よさの体験である。

2歳

愛着形成期である。この時期のスキンシップで安心感・幸福感が満たされ、オキシトシンが分泌され、自己肯定感を生む。安心な環境で本と出会う事を繰り返していくうちに、接触していなくとも対面での読み聞かせも楽しむようになる。なじみのある日常の世界観や、失敗や成長を疑似体験できるもの、言葉のおもしろさを感じさせる絵本がふさわしい。ページを自分でめくりたがったり、一見聞いてないような態度でも咎めず、絵本は楽しい時間であると体験させることが重要である。

3歳

繰り返しの言葉を好むようになる。読んでもらう言葉に興味を持ち、実際に自分で言葉を反復しようとする。時には同じページを繰り返して聞きたがったり、自分で言いたがったりする。読み聞かせで聞いた言葉を理解し、自分の言葉として脳に取り込もうとしている。しかし3歳では、行動の背後の「心」に注目して、予期することが難しい。ただし、他人を意識し関心を持つようになる。これは「共同注意」の時期と呼ばれる^(*7)。この時期の絵本としては、絵と文が調和している絵本や好奇心を満たす絵本を好む。3歳は、自分と他人、家族とそれ以外という区別が徐々に付き始める。それまでは家の中、家族だけが世界の全てだったのが、それ以外にも世界があると理解し始め、社会性が育ち始める。それと同時に自我も育ち、自分と他人の

区別がつき始める。自分の思いと他人の思いが異なることにも気づき、「いや!」「だめ!!」が始まる。「イヤ!貸さない!」は自我の育ちの証なのだ。3歳に「人にやさしく」「思いやりを持って」と期待するのは難しい。

3歳半になると覚える言葉が急増するが、言葉と言葉が繋がらない。好奇心があり、ストーリーにも関心があるが、脳の想像力が未発達なため、全体を把握するような抽象的な概念は理解できない。また記憶野の未発達のため短期記憶が不十分で過去と現在と未来が繋がらず、未来のことを予測できない。

子どもには、ストーリーより読み手の声や身体言語の方がはるかに影響を与える。それらによって子どもは絵本は居心地がいいものだとして経験する。メビアン(注8)の法則のように、人間は言葉以外のもの(表情、声のトーン、態度など)から大きな影響を受けている。また文章と関係なく、絵そのものに惹きつけられることも多く、絵本の一場面を大人になっても記憶することが多い。

4歳

物語の主人公と自分を重ねるようになる。言葉の意味を理解し、言葉の反復を楽しむ。4歳から自己主張が強くなるが、相手と自分は違う心を持つのだという「心の理論」(注9)はまだ獲得しきれていない。4歳の終わりから5歳頃になって自分と他者は違う心を持つことを理解できるようになる。このころ物語全体を把握できるようになり、それが社会への関心のきっかけとなる。しかし、遊びの観点から見ると、まだ平行遊びが主であり、他者の心を想像できても、みなで協力して行動することはできない。

5歳

このころになると物語の登場人物たちの気持ちを想像できるようになる。成長とともに受け入れる側の心に変化していく。同じ絵本を2歳、3歳、4歳、5歳と読んでもらうたび新たな感情が沸き上がる。しかし、読み聞かせ経験からも、小学1年になっても言葉だけで相手の心を理解し、わが事として思えるようになるのは難しい。他者の心を想像し、理解し、本当に共感できるようになるには、本人の心の成長とともに、社会体験や学び、或いは他

者の意見に耳を傾けることで自分の読みが深まることを実感してからだ。この思いに到達するには、愛着から始まる積み重ねが必要だ。

3 「読みあい」の空間

絵本は読ませるものでなく、読んであげるものだという背景には、子どもの理解のためだけでなく、読み手が音読することで新たな感動を得ることができることもある。「読み聞かせ」は一方的なものではなく、読む側にも大きな影響を与える。絵本を読んであげる時、読む・読まれる相互に響き合う感情が生まれる「読みあい」であるからだ。この名称を提唱されているのが、村中李衣氏である。村中氏は絵本や児童書の著作が多数ある他、ライフワークとして重度障害小児科への訪問や、高齢者施設での「読みあい」を長年実践されてきた。その中で特に感銘を受けたのは、女性受刑者が我が子のために絵本を読み、DVDに吹き込むワークショップである^(*10)。彼女たちは、精一杯思いを込めて読もうと絵本に向き合う時、生まれて初めて絵や言葉とたち向かう経験をする。言葉や絵に込められた思いと出会い、とまどったり、突然感情がこみあげたりする。その思いと向き合うことで、わが子のために始めた絵本の読み聞かせが実は自分に読んであげることになることに気づく。目の前の人だけでなく、心に浮かべた人によっても読む側が影響し合うのが「読みあい」であろう。これは一人黙読するのでは起きない感動であり、絵本は子供のためだけのものではないことを表している。

4 大人にとっての絵本

「読み合い」は読む大人にも大きな感動を与えるが、そもそも大人が自分のために絵本を音読する事が必要だと柳田邦夫氏が提唱されている。柳田氏は、黙読ではなく、自分のために毎日15分音読することを勧めている。大人になった自分が心の奥に潜んでいた本当の自分に読んであげることで生きる力を得ることができる^(*11)。NHKの『72時間』というドキュメンタリー

で絵本専門店がとりあげられていた回があった。そこには子どものために絵本を選ぶ大人だけでなく、自分のために幼い時愛読した絵本を探す大人の姿があった。この専門店は夜はバーになり、疲れたサラリーマンや心が折れそうになっている若者たちに絵本を読んであげている。現実生活の中で自信を失った大人が絵本と再び出会うことで救われていく姿が描かれていた^(*12)。

大人にとっての絵本を新しい観点から取り組んでいるものとして絵本セラピーが注目されている。創始者である岡田達信氏は、社会人が自分たちの心を見つめるために絵本を読みとることが効果を発揮する多くの事例を報告している。岡田氏の実践は、グループセラピーの形をとっている^(*13)。『ぐるんぱのようちえん』^(*14)など長年読み継がれてきた、同じ絵本を他の人はどう読み取るかの思いを披歴しあうことで、新たな気づきやより深い内省に結び付く。絵本は声に出して読み、読んでもらうことによって「一期一会」の空間が生まれるのである。作者が何を伝えたかったのかを探るという方向ではなく、絵本を読むことで自分の心にどのような感情が生まれたのか互いに披歴し合うというものである。初めて絵本と出会う人も再び出会う人も、絵本の世界に身を置くことでもう一度生きなおしする力をもらったり、今まで気づかなかった自分の心を知ることができる。

このように同じ絵本でも大人と子ども、特に乳幼児ではまったく違う絵本との向き合い方をしている。

5 子どもと大人の読み方のちがい

岡田氏は著書の中で泰羅雅登氏『読み聞かせは心の脳に届く』^(*15)を紹介されていた。それによると、読み聞かせをされている子どもの脳は、思考・創造などをつかさどる「前頭連合野」には活動がみられず、活性化していたのは情動・感情に関係している「大脳辺縁系」であり、岡田氏はそれを「心の脳」と呼んでいる。また岡田氏は、絵本を読んだことのある親なら一度は経験する「もう1回！読んで！」という子どもの要求、なぜ子どもは、知っている話を何度も聞きたがるのかという問題について、子どもは絵本を

「体験」しているからだと述べている。つまり、「言葉からイメージして「理解」しているのではなく、感情を動かして「体験」している状態」「子どもは絵本の世界に入りこんで、物語を体験している」と解説されている。

乳幼児が成長して大人になってから同じ絵本に再会すると、多くの人が幼い時に読んだ時とは別な印象を受けたり、記憶との相違に気づいたりする。そして新たな感動を得る。同じ絵本が何度もあらたな感動を与えてくれるのだ。自分の子どもに勧め、その子が親になりまたその絵本を読んでいく。子ども時代の自分が感じた楽しさを、我が子にも味あわせたいという思いが同じ絵本を選ぶ。「絵本はおもしろい」という体験をしなければ、また選ぼうとはしない。その子の好きな絵本を繰り返し繰り返し親が子供に読んでやり、それが親の喜びにもなる。この感覚は必ず心に深く残る。この喜びは、子どもの成長とともに育ち、それが本への興味にもなっていく。

松居氏は「幼児期に、より多くの喜びと楽しみ、言い換えればしあわせを、親から与えられた子供は、成長したとき、みずからのしあわせをしっかりと築きあげ、そして人とそれを分かちあえる人間に育つのだ」と述べている^(*)¹⁶⁾。この精神はそのままSDGsが設置される目的である「誰一人取り残されることのない未来」をつくる思いに通じる。つまり読まれ続ける絵本はSDGsの種が蒔かれる土壌となっているのだ。

絵本は人が初めて出会う外の世界である。好きな絵や言葉から、安心・興奮・楽しさなどの体験を与えてくれる。やがて「心の理論」を獲得する時期になると物語を理解し、登場人物に共感するようになっていく。そして小学生になると社会的視点から読み深めるようになる。絵本は持続可能な社会を強制されるものではない。絵本を読む中で自然に生まれる感情はとても豊かで幸せな記憶となり、そのような空間、時間を大切にしようという意識が生まれる。

すばらしい絵本と幼児期に出会うことが、持続可能社会をつくりたいと思う人を育てていくのである。

今回、展示・講演会で扱った絵本は主に60年、70年読み続けられ、「読んでもらうなら3歳、一人で読むのなら小学校低学年」とされる絵本が中心

であった。幼児期の受け取り方、小学校になってからの受け取り方の違いについてパネル化し、提案した。具体的な分析は次号に譲るが、本稿では一つのサンプルとして『かばくん』の分析をしてみたい。

6 分析1 『かばくん』

「かばくん」は、1966年に福音館から出版された岸田衿子氏の文、絵は中谷千代子氏による絵本である^(*17)。『おおきなかぶ』^(*18)や『ぐりとぐら』^(*19)など長年愛されてきた本と同じく裏表紙に「読んであげるなら3歳、自分で読むなら小学生低学年」と表記されている。この絵本は、表紙は以下のとおり圧倒的に大きな「かばくん」の上半身が描かれている。裏表紙と見開きにするとちょっとした驚きがある。裏表紙にはちいさな子かばくんがいるのだ。

あらすじを紹介する。

動物園に朝がきた。かめくんが少年に連れられて萌黄色の空気の中、動物園にやってきた。鳥やきりんはもうおきている。一番なかよしはかばくん。かばくんは、ちいさなかばくんと一緒にくらししている。



でもかばくんはとても寝坊助。もう11時なのにまだ寝ている。

「おきてくれ、かばくん」とよびかけると、ようやく目をさましてくれた。かばくんも「や、かめくん」とあいさつ。かばくんとかばのことかめくん3匹は一緒にプールで泳ぐ。

今日は日曜日。動物園にお客さんがたくさんくる。3匹はプールの中からたくさんの子どもの靴を見上げる。

食事の時間になった。かばくんはキャベツを一口でぱくり。おなかいっぱいになって、かばくんとかばのこはねむる。かめくんとは、もうさよなら。またあした。

動物園に夜がくる。かばくんたちもライオンたちもみんな静かにねむる。

乳幼児から小学生までと「読みあい」をして得た反応を基に分析してみる。愛着期は図書館や幼稚園など大人数の中で読んでもらうのではなく、両親や保護者の膝や添い寝の形でゆっくり読んでもらうことで言葉の意味より、柔らかな色合いやゆったりとした気持ちの良い時間を過ごせる記憶として残っていく。やがて本そのものへの関心から対面の「読みあい」で絵本の世界に浸るようになる。

3歳児には、かばくんの圧倒的な大きさにひきつけられる。かばくんの大きさを見開きによって驚きを持って感じる。裏表紙を広げることで、子かばくンを発見する喜びがある。パステルカラーの萌黄色が朝の空気を感じさせる。子どもは小さなカメくんの気分になってかばくんに話かけ、一緒に泳ぎ、お客さんを見物する。お客さんのくつばかりを見ていることをおもしろく思う。かばくんの大きさ、ゆったりとした動きを親しみを持って楽しむ。

4歳後半から小学生にかけて「心の理論」を獲得すると、絵本の視点がカメくんやかばくんたちになっていることに気づく。かばくんたちの視点に一緒に立つとどう見えるかを意識するようになる。かばくんやかメくんの気持ちに寄り添えるようになる。

小学生になると子ども自身が社会性を身に着け、同時に知識を身に着け始めるので、この絵本を今までと別の角度から読み始める。なぜ、朝早くからカメを連れて少年が動物園にくるのか、少年は籠に野菜をいれて、もしかしたら、飼育員さんの子どもかな。どうしてカメを犬のようにヒモをつけて散歩させているのかな。なぜカメさんはかばくんたちのプールで一緒に泳げるのかな。そもそもなぜ「かばさん」ではなく「かばくん」なのかな。おかあさんかばと子どものかばじゃないのかな、などである。

やがて学校や社会での学びによって、野生動物の現状や保護、あるいは動

物園の飼育問題などを見聞きすることで絵本の見方も変化していく。かばくんたちは動物園で人間たちをどんなふうに見ているのだろうか、夜の動物園の無防備に寝ている動物の姿を見て、野生ではこのようには寝れないだろう、動物園にいる動物はしあわせなのか、と絵本を外の視点から見るようになる。

7 分析2 『キリンがくる日』

動物と動物園の関係を考える次のステップの絵本として次の絵本を紹介する^(*20)。

あらすじを紹介する。

けんとかくんはキリンがだいすき。けれど動物園にはキリンがない。前にいたキリコは亡くなってしまった。檻には「キリンがくるのをまってくださいね」と看板がかかっている。「キリンいつくるのかな」何度も動物園にいったが、キリンはまだこない。けんとかくに園長先生がはなしかけた。「アメリカの動物園からもうすぐくるよ」けんとかくんは大喜び。けれど園長先生はこう言った。

「キリンは飛行機にのるんだよ。病気になることもあるんだ」けんとかくんは動物たちが動物園にどうやってくるんだろうということを考え始めた。おかあさんと別れたり、何日間も箱にとじこめられたり。でも園長先生は「それでもね、私はきりんにきてもらいたい。みんなにしっかり生きているところをみてもらいたいんだよ」と言うのだ。けんとかくんはキリンの勉強をもっとしようと思っていく。未来の子キリンに名前まで考えている。

この物語は、北海道釧路市の市民団体・チャイルズエンジェルの活動をも



とにつくられた。2012年5月、キリンのいない釧路市動物園の主婦たちが、「子どもたちにキリンを見せてあげたい！わたしたちが、動物園にキリンをプレゼントしよう！」と、「キリン基金」をつくり、キリンを購入するため目標金額は5000万円の募金活動をはじめた。子どもからおとなまで街中の人びとの共感を得、2013年3月に、目標金額に達し、キリンを購入できたという。

しかし、この絵本のもっとも目がひきつけられる場面は、飛行機の断面より背の高いキリンが箱にいれられて運ばれ、真っ暗な箱の中、一人首を折り曲げて青い顔をして心細そうにうずくまっている場面である。この場面を見て、初めて子どもは、キリンが動物園にくるまでの大変さを知る。キリンという親しみのある動物だからこそ、背の高さが想像され、空輸されてくることの辛さに共感しやすい。そしておかあさんキリンと別れる辛さにも思いやれるようになる。キリンに来てもらいたいと強く願うけんとかくんが園長先生からキリンが運ばれてくるまでの大変さを教えてもらった夜、自由にサバンナを闊歩する夢を見る。それはけんとかくん自身が動物園にくることがキリンにとっての一番の幸せではないと感じたからだ。

絵本にはそのような言葉はない。絵にかかれた箱のキリンを見て、読む側が思いを馳せるだけだ。

その上で園長先生の「それでも、わたしは、ここにキリンをよびたいんだ」「わたしは、どうぶつが、しっかりといきているすがたをみんなにみてほしい」という言葉を自分で考えてみるようになっていく。言葉はそれ以上語らないが、自分たちが動物を保護してあげるといふ強者の考えではなく、動物に来てもらい、生きる姿に我々が教えてもらっているのだという感謝の気持ち育まれる。

このようなキリンの身になって考える感情は、3歳は勿論、4歳5歳でも無理だろう。「心の理論」を持てるようになり、キリンの気持ちに寄り添えるようになって、動物園の存在意義について多角的に考えるためには様々な知識や社会的経験が必要になる。ただ、そのような知識や経験を身に着けた時、幼い頃から親しんできた絵本の絵が脳裏によみがえり、その場面が別

な意味をもって読み直すことができるようになると思う。それが絵本の力ではないだろうか。3歳は、明るい黄色や、キリンの顔にほほずりする様子に惹かれたりするかもしれない。それでも真っ暗な中うずくまるキリンの姿は記憶に残るだろう。5歳になって「心の理論」を獲得するようになると、そのシーンに共感するあまり不安を覚えるかもしれない。これらの心の成長とともに同じ絵本を読み直すことで、絵本から受け止める思いが深まっていく。それが絵本の魅力なのであり、読み直すことの大切さなのだと思う。

次号でその他の絵本分析の報告をする予定である。

注

- * 1 Japan SDGs Action Platform (外務省 SDGs サイト) 国際連合広報センター 2030 アジェンダ
- * 2 松岡享子『絵本を読むこと』東京子ども図書館 1973 たのしいお話
- * 3 松居直氏『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部(エディター叢書) 1973
- * 4 この章は以下の論文を参考にまとめたものである。
 - ・ 園田菜摘「3歳児の欲求、感情、信念理解—個人差の特徴と母子相互作用との関連—」『発達心理学研究』10(3) 1999(「3歳の時点ですでに他者の感情を理解できる段階」 「感情理解の発達は、家庭での相互作用の中で子どもの内的状態への言及がなされる」)
 - ・ 大河原美以「怒りをコントロールできない子の理解と援助—教師と親のかかわり」2004年金子書房(愛着関係に代表される関係性の中で「うれしい」などの言葉によって他者と共有され、社会化されていく)
 - ・ 金山英莉花・内山伊知郎「絵本の読み聞かせに対する母親の考えと愛着の関連」2021年「日本教育心理学会」(読み聞かせが楽しいと考える母親ほど、子供とともにいるのが嬉しい)
 - ・ 佐野さやか・永田雅子「自閉スペクトラム症幼児の社会性に関する研究展望—表情理解に焦点を当てて—」(2020、Vol 67)
 - ・ 菊池里映「1歳児の絵本読み場面における主体的行動—モノ・人・子どもの関係に蓄積される集合的記憶の想起—」(玉川大学教育学部乳幼児発達学科「教師教育リサーチセンター」年報 第11号 臨時増刊号「幼児教育」) (「心地良いと感じる母子関係・父子関係(情動性)から抜け出し、新たなあり方を求める(創造性)。」 「絵本を読む場面において主体的行動がみられる」 「親に包まれて読んでもらう段階から自分で積極的にページをめくる⇒人的環境において乳児が集合的記憶の蓄積することによって主体性が生成」
斎藤有・聖徳短期大学・児童心理コース「絵本から見る子どもの心の発達」2020・7・3 ホームページ)
- * 5 「愛着形成」期(愛着とは、子どもが特定の他者に対して持つ情愛的な絆のこと)(パウロビィ)「愛着」乳幼児とは、乳幼児が本能的に母親が応じるという母子相互関係のシステム(井上勝夫「テキストブック児童精神医学」日本評論社・2014年)

- * 6 2022年1月時点で全国の自治体の約6割がブックスタート事業を実施している。
- * 7 「共同注意」他者へ始発する提示・手渡し・交互凝視などの行動が含まれ、「心の理論」の前段階。自分と他者、そして対象との三者間でのコミュニケーションの中で生じる現象。自分と他者という二者が、他の第三の対象に対して一緒に注意を向けて、その対象についての認識や感情などを共有することを指す。
- * 8 「メビアンの法則」とは情報伝達の手段「言語・聴覚・視覚」において喜怒哀楽といった感情が矛盾して表現された場合、各情報が影響を与える度合いを数値化した法則。視覚55%、聴覚38%、言語7%である。
- * 9 「心の理論」とは1978年、アメリカの心理学者ブレマックとウッドルフが唱えたヒトや類人猿などが、他者の心の状態、目的、意図、知識、信念、志向、疑念、推測などを推測する直観による心の機能のことである。
- * 10 村中李衣『女性受刑者とわが子をつなぐ絵本の読みあい』2021年6月かもがわ出版。
村中氏とは第1回絵本サミット in 剣淵（2022年10月9日剣淵町絵本の館）でのご講演「物語を育てる・物語に育てられる」において貴重なお話をいただいた。ここにお礼申し上げます。NHK教育ハートネットTV「塀の外のわが子を思って」9月12日放送
- * 11 柳田邦夫「大人にこそ絵本が必要」（2022年6月27日『毎日新聞』（人生100年クラブ）『感性よみがえらせる』「毎日15分、ゆっくり音読すると、体にリズム感がうまれ、「幼き日」に帰るのは生きるエネルギー源になる。「心のみずみずしさ心身両面を健やかにしてくれる。だれかと絵本の中の言葉や場面を共通の話題にできると、毎日が明るくなります」
- * 12 NHKドキュメンタリー「72時間」6月10日放送「絵本専門店 わたしの物語」
- * 13 岡田達信『絵本はこころの処方箋』2011年 瑞雲舎『新・絵本はこころの処方箋』2021年 岡田氏には*10の「第1回絵本サミット」会場において貴重なアドバイスをいただいた。ここにお礼申し上げます。
- * 14 文 西内ミナミ、絵 堀内誠一『ぐるんぱのようちえん』1966年 福音館書店
- * 15 泰羅雅登氏『読み聞かせは心の脳に届く』2009年 くもん出版
- * 16 * 3
- * 17 文 岸田衿子、絵 中谷千代子「かばくん」1966年 福音館書店
- * 18 再話 A・トルストイ、訳 内田莉紗子、画 佐藤忠良『おおきなかぶ』1966年 福音館書店
- * 19 文 なかがわりえこ、絵 おおむらゆりこ『ぐりとぐら』1967年 福音館書店
- * 20 文 志茂田景樹、絵 木島誠悟『キリンがくる日』2013年 ポプラ社

追記

展示・講演会について剣淵町絵本館 鈴木千尋様、札幌市立西岡図書館 渡辺雪絵様に多大なご協力を得て成功できました。ここに御礼申し上げます。

なお本稿は、2022年度研究助成の成果の一つである。